



TITLE:

原猿類の發育段階的研究(III 共同利用研究 2 研究成果)

AUTHOR(S):

茂原, 信生

CITATION:

茂原, 信生. 原猿類の發育段階的研究(III 共同利用研究 2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 68-68

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160443>

RIGHT:

側は第1頸椎の横突起に、3例は第1、第2両頸椎の横突起に筋小束をだしていた。特にその中の1側は筋腹が大きくわかれ、*M. splenius cervicis* と名づけてもよいと思われるほどだった。

頭最長筋 *M. longissimus capitis* : 起始では、caudal end は第5～第7胸椎、cranial end は第3～第4頸椎の横突起であった。8側のうち4側は乳様突起内側の近くにつく附着部近くで筋腹がうすい腱性の浅層と筋性の厚い深層に区別できた。また *M. longissimus thoracis* の着き近くの筋腹から巾約5mmのうすい筋束が、頭骨附着部近くの(本)筋腹に橋状に存在するのが1体の両側にみられた。

頭半棘筋 *M. semispinalis capitis* : Howell and Straus は、Rhesus monkey で本筋を *m. biventer cervicis* と *m. complexus* に区別しているが、ニホンザルの例では8側のうち2側のみ区別可能であった。(Nishi は Rhesus monkey 100側のうち29%可能とのべている。)また筋小束を乳様突起の内上方、*M. digastricus* のすぐ上に独立してだすのが1側にみられた。起りの caudal end は第5～第7胸椎で、cranial end は第2～第3頸椎の横突起であった。

下頭斜筋 *M. obliquus capitis inferior* : 第2頸椎の棘突起より起り、第1頸椎の横突起に着くが、上頭斜筋 *M. obliquus capitis superior* の後頭骨の着きの直下にまでその着きかのびているのが1例にみられた。

以上ニホンザル4体8側について頸部背筋群を観察した。例数がすくないのにもかかわらず数多い変異がみられた点は注目に値する。

以上45年度共同利用研究を行った研究結果であるが、46年度共同利用研究にも本研究はひきつづいて、データをそろえたのち詳細を発表する予定である。なお本研究は46年度解剖学会 関東支部会で発表の予定である。

文 献

1. Howell, A. B. and Wm. Straus, Jr. (1933) *The muscular system*. Chap. V: the anatomy of the rhesus monkey (*Macaca mulatta*) 89—195.
2. Nishi, S. (1939) Die Rückenmuskeln von *Macacus rhesus*. Ein Beitrag Zur Myologie der Primaten unter Berücksichtigung der menschlichen. *Jap. J. Med. Sci.*, 7, 153—171.

原猿類の発育段階的研究

茂原信生(東大・歯)

食虫目(主として日本産のヒミズモグラ *Urothrinchus*

talpoides)と、分類学的位置に疑問の残るツバイ(コモン・ツバイ *Tupaia glis*)のSoftex線による撮影によって、化骨年齢を明らかにし、それと歯牙の萌出による年齢区分とを比較する。

これによって、ツバイならびにヒミズモグラの年齢推定を明確にし、両者の間における差異もしくは相似点を明らかにする。

霊長類の生活様式とロコモーション

——その形態学的観点からの解明——

田 隅 本 生(J・M・C*)

文献資料の収集に、かなりの時間を要したが、ほぼ本研究遂行上、必要かつ重要な50篇あまりの文献は整備された。

46年2月下旬および3月下旬の2回にわたり、上京して方法論の討議を重ね、解剖学的・力学的観点からアプローチすべく、資料の収集を開始した。

近い将来、この線に沿って研究成果を発表する予定である。

* 1971年4月より、京大、理、動物。

ニホンザル自然群でのロコモーションの研究

石田英実**・伊沢紘生***

渡辺 毅**

(**霊長研, ***J・M・C)

ニホンザルは半地上性のサルといわれ、自然群においては、樹上および地上を利用する生活形態をとっている。その中でいくつかのロコモーションパターンが見出されるが、それらが生活の中でいかなる<value>を有するかを分析することは、ニホンザルの運動器官の形態を機能的に考察するうえで、あるいはまた適応という観点からも重要である。このような目的から、積雪期における地上と樹上の利用状況、および雪上でのロコモーションの様態を中心として、白山自然群を対象に研究をおこなった。

木曽駒ヶ岳東面における、ニホンザル研究保護のための基礎調査を含めた地域ポピュレーションの把握に関する研究

工藤樹一(信大・農)

現在、極少になった自然林における、ニホンザルの研